

第2回在宅療養ワークショップ。住みやすい地域を目指して!!



2026年 5月14日(木) 撮影

13期生(2年生)は尼崎市役所包括支援担当様のご協力で、尼崎市民の方もご参加いただく在宅療養ワークショップを実施している。今回は兵庫県立大学の先生と学生を交えて、イギリス、インド、日本の医療を学び、「地域にどのように貢献できるか」について、KJ法を用いたグループ学習を実施。各班から様々な意見が出た。以下は生徒の意見の一部抜粋。

「英の制度に見習う点がある」「なぜ見習う必要があるのか」「ボランティアで地域貢献したい」「地域を知ることが大事」「質問を一杯されてとまどった。」「次はもっと頑張る!!」

自分と他者は価値観が異なる。それをすり合わせることで自分と対話する。「関係の中で学ぶ共同体」がそこにあった。世代や性別を超えて、共に暮らしやすい地域を目指す学び。次回のワークショップは6月4日。自ら学び、他者と学ぶ。主体的対話的な学びを通して、一緒に考えを深めて行こう!

どんな社会で生きたいですか? 担当者のつぶやき

生命倫理の第一弾として、計8時間で「安楽死」について考えた。まず、NHKスペシャル『彼女は安楽死を選んだ』とNNNドキュメント『だから私は生きたい』を視聴し、本人の苦痛、尊厳、自己決定、家族の葛藤について意見を表明した。当初は「苦しみから解放される権利」「自分らしい最期を選ぶ権利」として、安楽死に賛成・条件付き賛成の声が多かった。しかしその後、障がいのある人や高齢者が「死を選ばされる」危険性、社会的圧力を扱った映像を視聴し、生徒達の考えは大きく揺れた。安楽死は個人選択だけでなく、社会のあり方と深く関わる問題と気づき、慎重・反対寄りや判断保留の意見が増えた。さらにALSの妻を20年以上介護されたSさんの実体験を聞き、家族の支え、在宅療養の現実、「声を失っても生きる意味を支える関係性」について学んだ。「本人の意思」も人との関係や支援によって変わりうることを、看護や福祉は「治す」だけでなく「生きる力を支える」役割があることを考えた。最後に、安楽死制度を考えるなら「何を社会として整えるべきか」、どのように患者が「生きたい」と思える社会を作るかを話し合った。単純な賛否ではなく、「どういう社会で生きたいのか」という問いとして考える授業となった。

【「意見」は「異見」。異見の中に新しい出会いがある。】

類型授業を通して、毎週たくさんの意見表明を読む。例えば先週の災害要支援者の振り返り課題で、被災時に誰を対象にどのように支援を行うかを書いてもらった。

「幼児を助けたい」「まずは高齢者」「障害を抱えた人」

「まずは自分を守る」と様々な価値観で書いてくれた。

当然ながら意見は人によって異なり、全く同じはない。だから人と関わると、時に悩むし、傷つくのだと思う。

しかしこんな意見も多い。「最初は〇〇と考えたけど、議論の中で△△に変わった。自分にないものを学んだ。」これが共同の意義と思う。他者を通し自分を更新する。なかなか大人にも出来ない学びを高校生が行っていた。

【「意見」は「異見」。異見の中に新しい出会いがある。】

医療、教育、福祉は世代や性別を超えてチームで行う。患者や利用者は当然一人一人異なる。いきなり「自分と意見が異なる人」、「立場が違う人」への理解は難しい。

「他人は自分を写す鏡」として、この練習を学校で行う。

他者に写る自分をみることで、新しい自分と出会える。

「異見」を恐れず、勇気をもって!共に学んでいこう!